

目次

1. 問題と目的

- 1-1. はじめに
- 1-2. 非行少年の定義と動向
- 1-3. 非行の要因
- 1-4. 非行の心理的要因
- 1-5. 立ち直り研究

2. 研究Ⅰ

- 2-1. 対象者
- 2-2. データ収集
- 2-3. 分析方法
- 2-4. 結果と考察

3. 研究Ⅱ

- 3-1. 対象者
- 3-2. データ収集
- 3-3. 分析方法
- 3-4. 概念生成の例
- 3-5. 結果と考察
 - 3-5-1. 全体のストーリーライン
 - 3-5-2. 各カテゴリーの説明
 - 3-5-3. 考察

4. 総合考察

- 4-1. 総合考察
- 4-2. 今後の課題

5. 謝辞

6. 引用・参考文献

7. 添付資料

1. 問題と目的

1-1. はじめに

少年非行件数は近年、「増加傾向」にあり、それは「突然キレて行かうもの」であり、「凶悪・粗暴化したもの」でもあり、「保護者のしつけが不十分な家庭で育った」子どもが行っているというイメージを、世間では持たれている。しかし、実際の少年非行はこれらのイメージと合致しているのだろうか。内閣府の非行少年に関する世論調査(2010)によると、少年非行が増加していると考える人は全体の 75.6%となっている。また、非行少年の印象として「自分の感情をコントロールできなくて行かうもの」と答えた割合は 62.5%「凶悪・粗暴化したもの」と答えた割合が 47.6%、「明確な動機のないもの」と答えた割合が 31.5%と、世間では非行をする少年に対し「理由なく突然悪い事をしている、なんだかよくわからない子」どもという印象を持っている。さらに、非行を起こす少年の経緯として「保護者が教育やしつけに無関心な家庭の少年」を挙げたのが 55.9%と一番多く、「学校や家庭に居場所がなく孤立している少年」「保護者などから虐待を受けたことのある少年」「何も問題がないと思われている少年」という答えが続いた。半数以上の人が保護者との関わりによって非行行動を起こすと考えているのがわかる。確かに、非行行為は許されたものではないが、テレビ報道などの影響により、少年達の背景・環境を考慮せず、少年に対する悪いイメージばかりが先行しているように感じられる。わざと話題性を出しているというのは理解できるが、報道している人間もまた、少年が自分から遠いよくわからない人間だと感じているのではないだろうか。このように非行を経験した少年を理解できないと、少年が地域に帰ってきたときに関わらなくなってしまうかねない。非行経験のある少年も地域で生活をするが、このような認識では精神的にも物理的にも『居場所』がなくなってしまうのではないだろうか。

1-2. 非行少年の定義と動向

わが国の法制度は、犯罪の責任年齢を 14 歳以上と定めている(刑法第 41 条は「14 歳に満たない者の行為は、罰しない。」としている。なお、民法上は、14 歳以下の行為についても保護者等への責任が問われ得る)。しかし、20 歳未満の者の犯罪行為には、少年法が適用され(少年法第 2 条)、原則として刑罰でなく処分の対象となる。

なお、少年法は「少年非行」として次の三つの類型を挙げている。

①14 歳以上 20 歳未満の少年による犯罪行為

②14 歳未満の少年による刑罰法令に触れる行為

触法行為…刑罰法令に触れるが、刑事責任に達しないため刑事責任を問われない行為

③20 歳未満の少年のぐ犯事由があつて、将来罪を犯し、または刑罰法令に触れる行為をするおそれがある行為

上記のそれぞれの類型にあたる少年を「犯罪少年」「触法少年」「ぐ犯少年」と呼ぶ。
また、年齢により「年少少年（14、15 歳）」、「中間少年（16、17 歳）」、「年長少年（18、19 歳）」に分けて説明することもある。警察白書(2013)では、以下のように説明されている。

(1) 非行少年.....犯罪少年、触法少年、ぐ犯少年をいう。

ア 犯罪少年.....犯罪行為をした 14 歳以上 20 歳未満の者（少年法第 3 条第 1 項第 1 号）

(ア) 刑法犯少年.....犯罪少年のうち刑法犯で警察に検挙された者

(イ) 特別法犯少年.....犯罪少年のうち特別法犯で警察に検挙された者

イ 触法少年.....刑罰法令に触れる行為をした 14 歳未満の者（少年法第 3 条第 1 項第 2 号）

ウ ゑ犯少年.....刑罰法令に該当しないぐ犯事由があつて、将来、罪を犯し、又は刑罰法令に触れる行為をするおそれのある 20 歳未満の者（少年法第 3 条第 1 項第 3 号）

(2) 不良行為少年.....非行少年には該当しないが、飲酒、喫煙、家出等を行つて警察に補導された 20 歳未満の者をいう。

また、平成 24 年中における少年の補導及び保護の概要(2013 警察庁)によると、平成 24 年中における刑法犯少年の検挙人数は、9 年連続の減少となった。しかし、中学生によるバスジャック目的の運転手刺傷事件等、社会を震撼させる重大な事件が発生したほか、再犯者率の上昇や低年齢化の傾向が認められる。

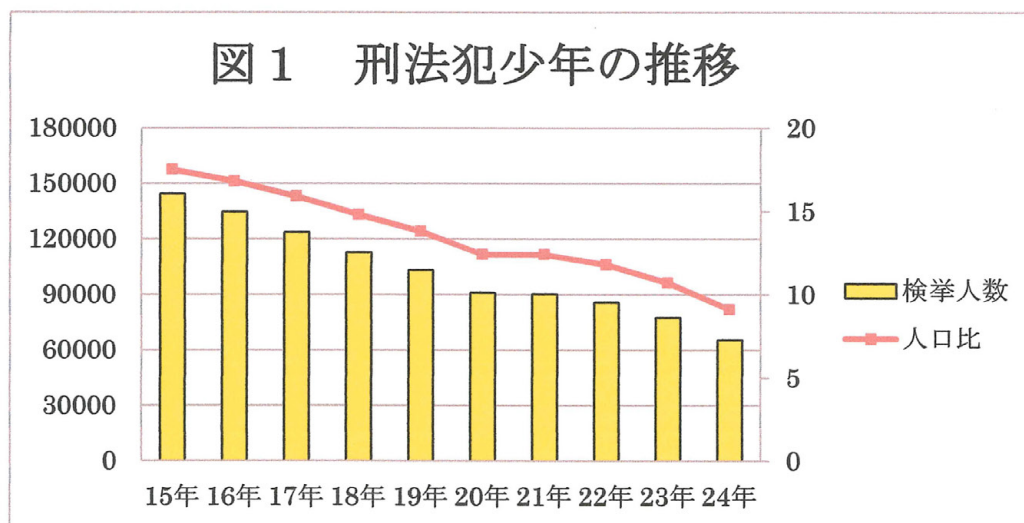
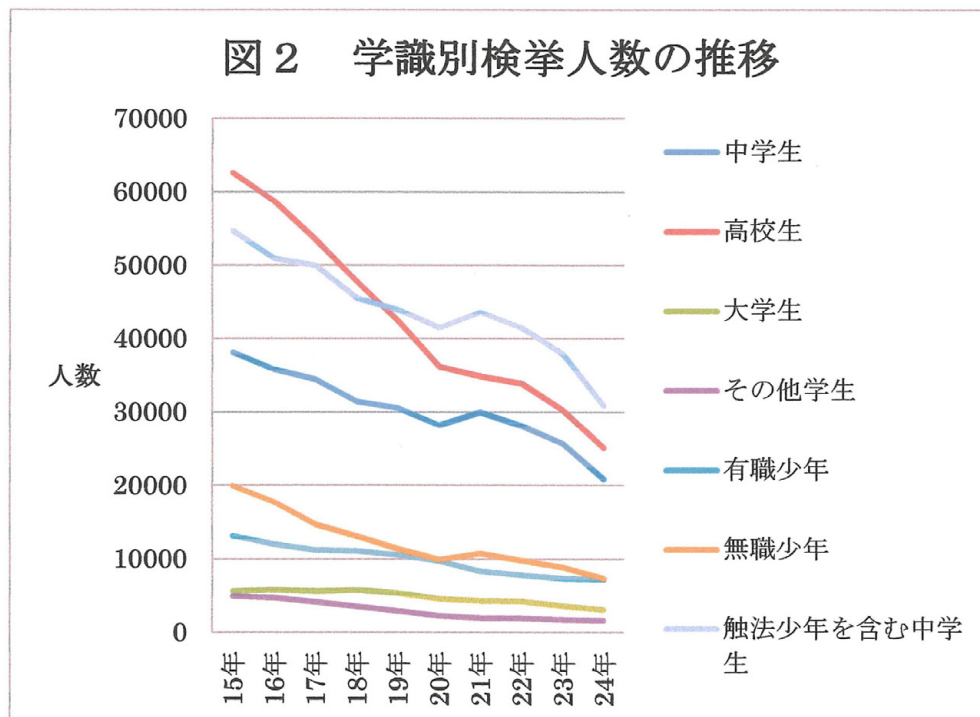


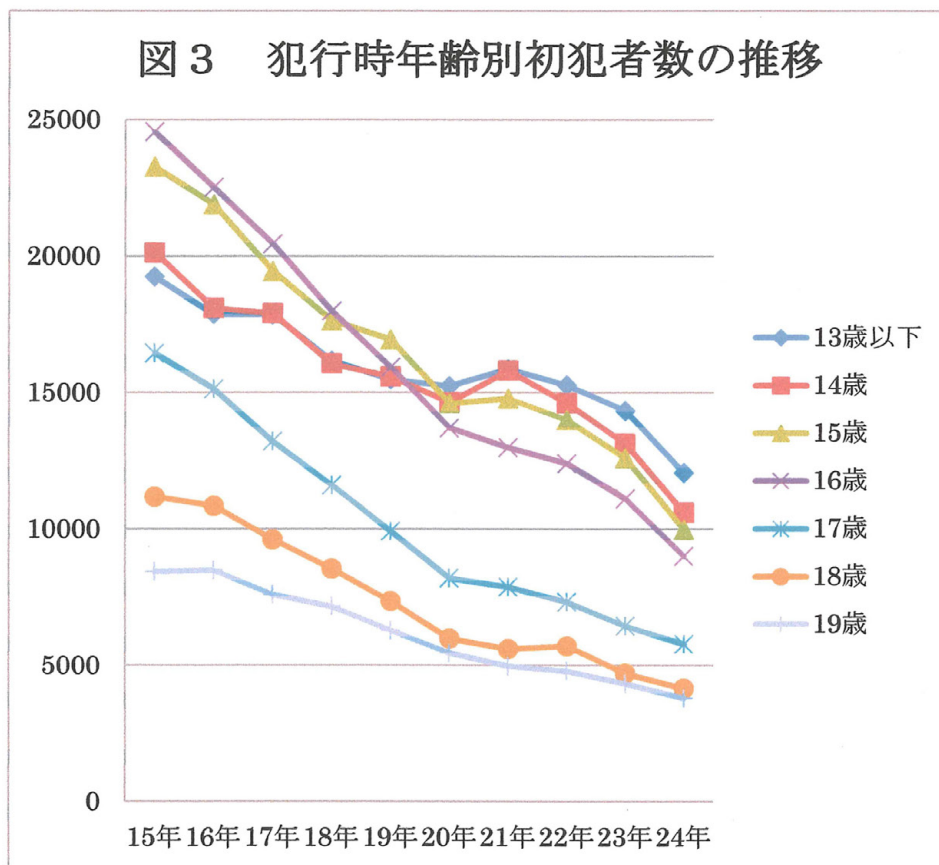
表 1 非行少年等の検挙・補導人員

	15 年	16 年	17 年	18 年	19 年	20 年	21 年	22 年	23 年	24 年
刑法犯少年	144404	134847	123715	112817	103224	90996	90282	85846	77696	65448
特別法犯少年	6771	6272	5603	5438	6339	6736	7000	7477	8033	6578
交通事故に関わる 自動車運転過失致死等	37741	38038	34738	32616	28779	25881	24283	23615	21777	2175
道路交通法違反	520248	491126	455634	397111	371572	328429	317664	289624	267056	24705
触法少年(刑法)	21539	20191	20519	18787	17904	17568	18029	17727	16616	13945
触法少年(特別法)	355	401	407	462	608	720	920	787	977	1076
ぐ犯少年	1627	1657	1508	1482	1379	1199	1258	1250	1016	993
不良行為少年	1298568	1419085	1367351	1427928	1551726	1361769	1013840	1011964	1013167	91792

また、過去 10 年間刑法犯少年の学識別検挙人員及び触法少年を含む中学生の検挙人員の推移は図 2 のとおりである。触法少年を含めると平成 19 年以降、中学生が高校生を上回り最多となり、人口比でも平成 20 年以降、触法少年を含む中学生が高校生を上回っている。

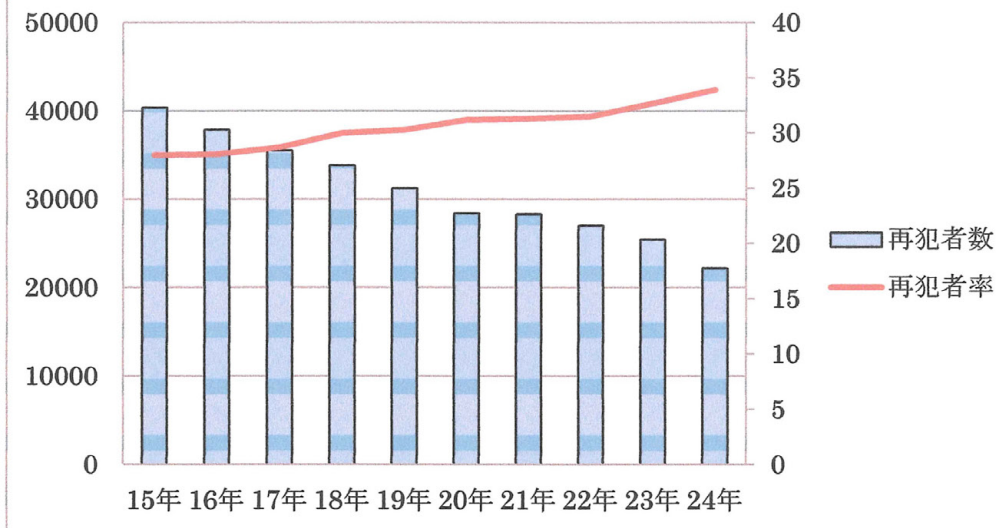


さらに初犯者を年齢別にみていくと、図3のようになります。過去10年間の刑法犯少年の初犯数は平成18年まで16歳が最多であったが、平成19年には15歳に下がり、平成20年以降は14歳が最多となっている。さらに13歳以下の初犯者数は、5年連続して14歳を上回っている。人口比でも平成21年以降は14歳が15歳を上回っており、低年齢化が認められる。



次に、過去10年間の刑法犯少年の再犯者数等の推移は図4のとおりである。平成24年中の再犯者数は2万2179人と減少傾向にあるが、再犯者率は15年連続で増加して33.9%となり、統計のある昭和47年以降で最も高い。また、再犯者の人口比は3.1で、成人の1.0の3.1倍となった。

図4 刑法犯少年の再犯者の推移



以上より、少年非行の刑法犯検挙人数は近年減少傾向にあるが、人口比でみると高い水準にあり、再非効率も近年増加傾向にある。また、非行少年の年齢に着目すると、近年、児童自立支援施設等装置人員に占める13歳以下の年少者人員の増加などからも、年少少年の占める割合の増加が指摘されている。以上を踏まえると、今後の少年非行の対策においては、低年齢層の少年に対して効果的な処遇を行い、早期に非行の目を摘むとともに、再非行防止に効果的な処遇を推進することが求められる。

1-3. 非行の要因

非行の原因については、様々な要因が考えられる。

小林寿一(じゅいち)(2008)は、①本人の性格等②家庭・親子関係③学校適応④友人関係⑤地域社会の5つの要因が挙げている。①では衝動性の高さ、逸脱的メディアとの接触が非行と関連し、②では親の養育機能の不全、親子間の情緒的結びつきの弱さ ③では学業不振 ④では遵法的な同輩から疎外されること(スポーツなどの活動と一緒にする友人がいない) ⑤インフォーマルな統制機能の欠如(青少年の行動をみまもり、必要な働きかけをする大人のいないこと) が非行と関連していた。こうした非行要因はそれぞれが独立的に少年非行を促進することもあるし、複雑に関連しながら非行を促進することも可能であり、おおむね後者の方が有力である。と述べている。

また安藤らの研究(2005)では、少年を理解するためには、少年を「生物学的基盤」「環境要因」「心理—社会的要因」の3つの側面から分析し、どこにどのような非行促進的なリス

クがあるのか、非行を行うきっかけになったのはどのようなものがあつたのを理解することが求められるとされている。なので、非行促進的な要因を発見し、そのリスクを引き下げる方法を検討し、対応を考えるべきだと述べられている。

さらに藤川(2007)は、「非行少年と発達障害」の関係を論じている。重大少年犯罪でPDDを主とする発達障害が鑑定されることが続いている。藤川は発達障害が非行の調節的要因だとは考えていないが、犯罪を構成するリスク要因の一つとして取り上げている。

さらに、内閣府による「非行原因に関する総合的研究調査」(2010)の考察によると、小木曾は今回の調査より、「非行と虐待の関係」さらに虐待だけでない、希薄な親子関係などの「家庭状況」にも言及している。日本弁護士連合会が実施した調査研究によれば「家庭裁判所送致回数が2回以上の群に、親から頻繁に虐待をうけていた物が多く含まれる」という。そのうえこの調査報告によれば、被虐待経験のある子どもは自転車窃盗など「一般少年」が踏みとどまったというのが多いのに比べ、ついやってしまったなど、犯罪抑止ができにくいことも指摘される。そして、他の家庭状況については「親から愛されていないように感じる」「親は私のことを信頼しているか」などの項目で一般少年と非行少年の差が出ている。そこには会話があまり交わされないなど希薄な親子関係が存在し、子どもはそれを親が自分を愛してくれていないから、信頼もされていないからだと思うようになっていくのであろう。そして、特に被虐待児と言われる子ども達の自尊感情が特に低いと言われる。さらに学校生活の面では「学業不振」が目立つ結果となった。さらに「授業のおもしろさ」とも関連してくる。非行少年は「だいたいつまらない」と答え、授業に集中できず、学業成績が上がらないという結果になっていく。そして、これも「自尊感情」とも関連してくる。つまり、「学校社会」と言われる現代では、学校の評価がある意味、人間の評価と見なされる傾向がある。そこで、非行少年の多くは学校の成績で「自分は何をしてもダメな人間だ、価値のない人間」という感情をもってしまふ。と述べられている。

また、村尾の考察によると、非行少年は一般少年より暴力などの虐待体験が多く、家庭に不満や不充足感を持ちやすいことが読み取れる。非行少年の方が「友達と深夜まで遊びまわった経験がある」「親友を得たきっかけが街で知り合った友人」という項目が高いことより、行動範囲は学校外へと広がり、友人は盛り場・街で知り合うことも多くなる。これは、やはり夜間に家庭で充足するというよりも、家庭外へと気持や行動が向かうとも解釈することができる。

以上より、非行の要因は家庭・学校・友人・地域・本人特性など様々な要因が原因となっている。さらに、これらの要因からくる自尊心の低さも関係しているように思われる。一因として家庭内、学校、など要因の中での「居場所のなさ」が非行に関係いし、「居場所が作れない」ことから再犯が起こるのではないかと考えた。

1-4. 非行の心理的要因

非行経験のある少年の心理的要因についても様々な理論が提唱されている。

「精神分析理論」は Freud によって、その考察に役立つ重要な概念や考え方を提起されている。藤岡(2001)では、フロイトが打ち立てた精神分析理論は、心の主体である自我が、衝動的な本能に対抗する超自我を取り入れる過程を重視する。この超自我の形成は、エディプス（エレクトラ）・コンプレックスを解決することで形成される。その解決により、少年は親の道德基準を取り入れ、自らの道德基準・良心とするのである。その結果、幼少期のように本能的快楽に基づいて行動するのではなく、現実に対して社会的・道徳的に対応できるようになる。だが、このコンプレックスの解決に失敗すると、超自我を形成することができず、本能の持つ攻撃性や性的衝動を抑制できなくなる。こうした観点により、殺人などの攻撃的犯罪者や性的犯罪者の心の働き（心的力動性）が解釈できるのである。またこの理論では、幼少年期の精神的な外傷（トラウマ）が青年期以降の行動に影響を及ぼし、児童虐待や性犯罪の原因になるとする解釈もなされている。と述べられている。

この後、Freud より後の精神分析家による理論の例として、安香宏(2008)でこの様に述べられている。Aichhorn(1936)によると、超自我の形成不全を中心に考えるが、その成因として①親の欠損とか愛情の欠如のため大人との一体化が妨げられること②逆に親の溺愛や無規制のため行動にけじめがなくなること、を挙げている。また Friedlander(1947)は、イド、自我、超自我のそれぞれの発達障害を中心に考え、超自我の形成不全を重視している。そして、Friedlander はこの発達障害を反社会的性格と名付けた。この反社会的性格を主軸に①反社会性格だけのもの②軽度の反社会的性格と環境の面からの強い情緒的緊張を伴う要因③経度の反社会的性格と神経症的葛藤を起こさせるような要因④かなりの程度の反社会的性格と空想を日常生活の中で実現化しようとする神経症的なもの、の4タイプに分けている。

また発達の観点から、サリバンとグラント夫婦による「対人成熟水準に基づく非行理論」がある。彼らは対人関係認知の仕方からみた発達段階をピアジェ的な考えで提起している。非行少年は対人成熟度の低さがもっとも関連深いと考え、従来の研究者の考えから9類型を分類している。①非社会的攻撃型(社会化されていなく、欲求が阻止されると攻撃的となる)②非社会的受動型(社会化されていなく、欲求が阻止されると受動的・逃避的になる)③同調的未熟型(主体性が低く、他人に認められなくて周囲のいいなりになる)④同調的非行文化同調型(主体性が低く、身近な優勢な風潮にそまってしまう)⑤他者操縦型(自分の思い道理にするために他者を利用する)⑥神経症的行動化型(不安が強く、その不安から逃れるために爆発的な感情発散を行う)⑦神経症的不安型(不安が強く、その不安を内攻させてひきこも

ってしまう)⑧状況的情緒反応型(一時的なインパクトに対し感情が乱され行動に出る)⑨非行文化同一視型(自分から進んで違法行為に身をそめていく)。

以上より、精神分析的理論では超自我の形成不全から少年を理解しようと考えている。超自我はエディプスコンプレックスの解消で獲得できるといわれているため、その段階で葛藤が生じている可能性がある。つまり、少年たちは三者関係が持てていないのではないだろうか。また発達の観点からも、対人成熟度が低いと考えられている。その要因も超自我の形成不全などからはじまる、三者関係さらには二者関係が不安定で獲得できていなかったためであろう。対人成熟度が低く発達段階の獲得がされていないため主体性が乏しく、その葛藤による不安があり、ついては少年たちが求めるものはその獲得にあるのではないかと考えた。

1-5. 立ち直り研究

非行要因についての研究は数多く存在するが、非行からの立ち直りについて研究は 1990 年代から行われてきたため、まだ数が少ない。その中でも白倉(2011)は「内省力」「支援を受け入れる力」「危機を乗り越える力」「保護能力」が必要だと述べている。白井ら(2011)は支援者との「出会い」が立ち直りに必要で、その「出会い」を成立させるために「抑うつに耐える力」と「ひたむきに物事に取り組む力」という尺度が必要だと述べられている。

以上より、立ち直りには、少年が「内省」をし、支援者と「出会い」、その支援者からの「支援を受け入れる力」を身につけ、「危機を乗り越え」「ひたむきに物事に取り組む力」を得られることが必要である。確かにいくら支援があっても、受け入れられなければ意味がない。もちろん、少年が非行行為を改めなければ立ち直りをしたとは言えないだろう。しかし、少年側だけでなく、支援者側にも何か提供できてない部分があるのではないだろうか。立ち直りたいと感じている少年が求めている支援を、本当に行えているのであろうか。

以上より、本論文では非行の要因に「居場所のなさ」があり、超自我の形成不全と対人成熟度の低さもあり、それを得ることが重要であると考え。そこで、少年が居場所や対人成熟度を得るために必要な支援はどんなものであるのか。非行経験のある少年と、非行からの立ち直りを支援している支援者双方からのインタビューを行い、実際に行われている支援と、少年の必要としている支援のずれを論じていく。

2. 研究 I

本論では、非行経験のある少年の立ち直りのプロセス明らかにするために、質的研究

法を採用し、半構造化面接を用いた。また、研究Ⅰでは、支援者の支援がどのように行われているのか、どのように考えているのかをインタビューデータから考察した。

2-1. 対象者

非行経験のある少年の支援者として、保護司、BBS 団体職員、警察少年保護センター職員、弁護士、児童自立支援施設職員、の5人にインタビューを行った。警察少年保護センター職員、弁護士の2人が女性、保護司、BBS 団体職員、自立支援施設職員の3人が男性である。非行経験のある少年が立ち直る際に関わる支援者を選び、インタビュー依頼を行った。

2-2. データ収集

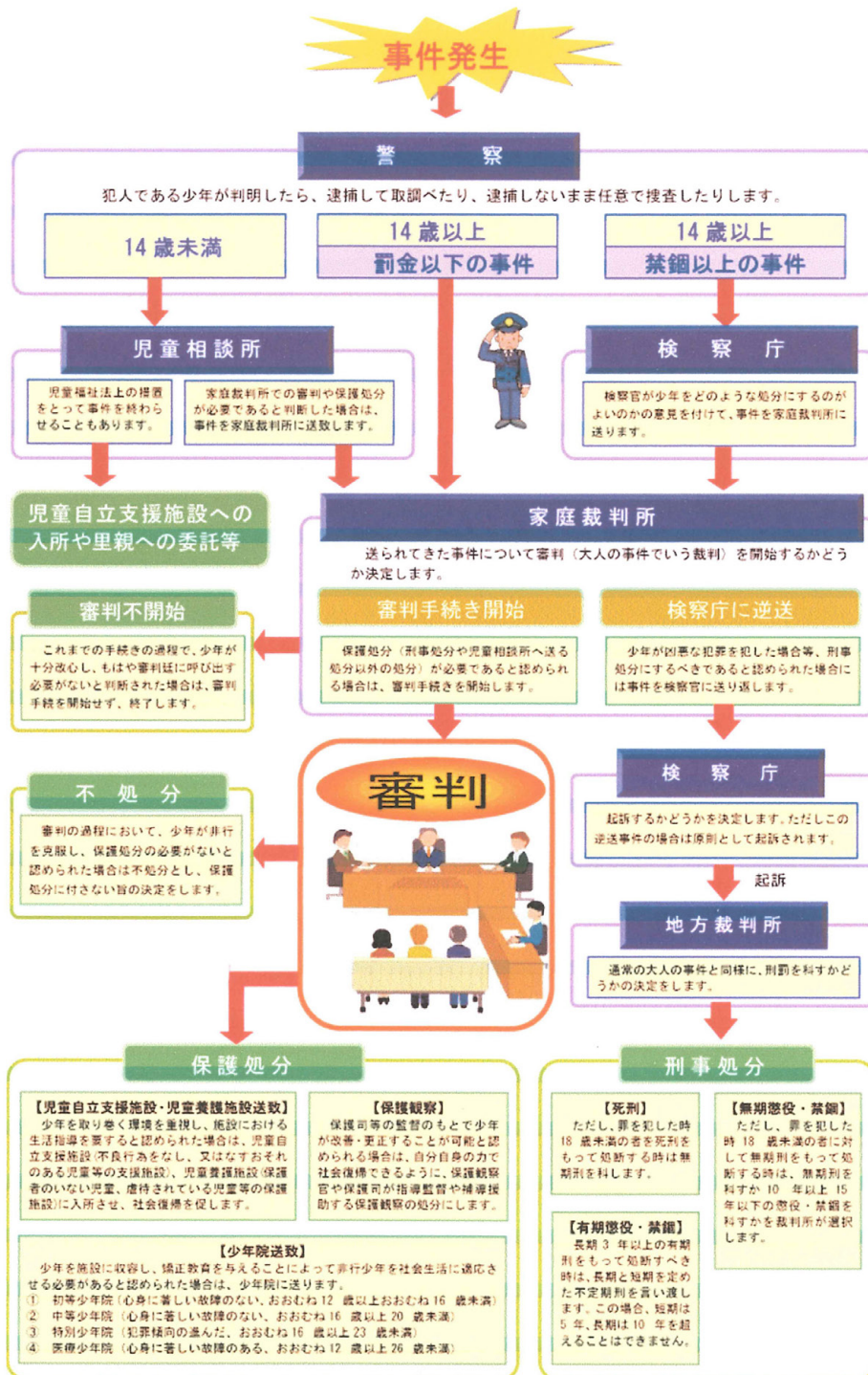
データ収集は2013年10月～2013年12月の間である。非行からの立ち直りに携わる様々な立場の支援者にインタビューを行った。非行経験のある少年の支援者ははじめに自立支援施設職員に話を聞き、その方から少年審判を多く受け持つ弁護士の方を紹介していただいた。保護司、BBS 団体職員、警察少年保護センター職員は、電話でアポイントを取り、インタビューに協力していただける方のみお話を伺った。

インタビューは50分～80分程度の半構造化面接を行った。質問項目は、「今行っている支援」「非行を行っていた(いる)少年の状況・環境」「立ち直ったと思う少年について」「立ち直り支援でできていること・他に必要だと思う事」を中心にインタビューを行った。インタビューの際に、許可を頂き録音をした。

2-3. 分析方法

今回は、立ち直り支援全体を見渡し、考察できるように様々な分野の方にインタビューを行った。研究Ⅰでは少年の処遇にそって、その時に関わる方の各インタビューを考察していく。少年の処遇は以下の図に沿って行われる。事件が発生すると、まず「警察」が関わる。次に14歳以下だと、児童相談所から「児童自立支援施設」へ行く。14歳以上だと家庭裁判所での審判で「弁護士」と関わる。審判後に「児童自立支援施設」に行く場合もある。保護処分を受ける場合だと「保護司」と関わる。少年院送致後も、保護観察となり「保護司」と関わる。その保護司からの依頼で「BBS」と関わることもある。

図5 少年事件手続きの流れ



(図:香川県警 少年事件手続きの流れ)

2-4. 結果と考察

① 警察

警察官は少年が非行行為をした場合、一番最初に関わる支援者であろう。また、警察は幅広い少年非行の対応をおこなっている。警察では少年警察活動といって、少年非行防止及び保護を通じて健全な育成を図っている。街頭補導や非行少年の調査だけでなく、継続補導や少年相談などの立ち直り支援を行っている。今回は警察での相談業務や立ち直り支援に携わっている、保護センターの少年相談専門員の方にインタビューを行った。

警察で行っている事は、主に相談業務と学校と他機関や地域を繋ぐ事である。非行の入り口として対応するので、教師や親から依頼をうけて相談業務を行っている。つまり、大きな事件を起こす前に対応をしている。また、地域の学校の校内循環を行い、声掛けを行う。さらに、学校と家庭や学校と地域資源や家庭と地域資源を繋ぐ活動もしている。例えば、学校のケース会議に出席し、学校の中だけで対応できないことをしている。

また、少年の様子を尋ねると「大人を信じられないって子がほとんど。そんな子の希望になれば。」「じっくり話を聞いてもらえたのは初めてだと言われた。」「つかまって、初めて自分の話を聞いてもらえた気がする。って。」「みんなハリネズミさんみたいですよね。話聞いてほしいんだけど、つんけんしちゃって、うまく近づけない」などと語っていた。ここから、少年は大人との二者関係を上手く形成できないように思われる。また「家庭で一对一で関わる事が少なかった子が多い」「ちっちゃい変化とか認めてもらえなかった」などという語りもあり、関係を作った経験が積めないまま学校という社会に出てきてしまったのかもしれない。学校や親からの依頼でも、意外と相談にちゃんと通う子が多いという。この相談で少年達の求める関係づくりがなされているのだろう。また「関係ができると不安がいっぱい出てくる」とも語られていた。

ただ、警察の相談員にも人数の限界がある。そのため、ボランティアさんと協力しての地域の繋がりづくりにも力を入れている。例えば、教員を退職した方や学生ボランティアの方に学習支援をしてもらったりしている。個別で関わることで、勉強ができるようになるだけでなく、関係づくりの基盤を少しずつ作れればと考えている。「地域で協力して子どもを見て、きめ細かい声掛けをしていくことで、取りこぼしをなくしたい」と語っている。少年達に対し、相談センターや地域で一对一の関係づくりを行おうという活動を通して、三者関係に移行する前の二者関係づくりの基盤を生成しようとしている。また、相談センターは期間が設けられていない。望めば相談を続けられるという点もメリットだと考える。いくら関係を作ろうとしても、期間で切れてしまえば意味がないだろう。期間を設けないと、少年達が自然と相談センターに来なくてもよくなる時期、つまり少年の安定を待てる。また、個々でその時期も変わってくるだろうから、期間を決めずにその相談センターで相

談できるのはメリットだと考える。

また、この地域では育児相談などで気軽に区役所に行けるようになった。「区役所ともつと繋がれたら。非行ってその場の問題じゃなくて、小さいころからの問題だから」「年や学年に関わらずに見ていけたら」「18歳以上の受け皿ってなくて、そこも必要だと思う」と語られている。今警察では予防の観点が重視されており、区役所や学校など、横のつながりを重視した支援を行っていきたく考えている。また「家庭介入の切り口というか、他とのつなげる事をする」と語られるように、横の繋がりを強化することで、家庭への介入の切り口も増える。家庭だけでなく、地域全体で子どもを見ることで、家庭も安定するし、予防になるのではないだろうか。

以上から、警察では一対一で関わる機会をふやすことで関係づくりの基盤づくり、地域の繋がりを強化することで予防をしていこうと考えている。

② 児童自立支援施設

児童自立支援施設に来る子は、「ほとんど被虐待児」だと語っていた。また「地域の刺激から遮断された世界で、自分の課題を見つめて規則正しい生活、子どもらしい生活をする。で、だんだん育ってくるものがあるんですよね、基盤が。よく言われるのが、2者関係からって。」と、家族内での関係づくりの不備や、二者関係の基盤の不安定さが語られている。さらに、この部分を施設内で育てようとしている。また、「家族は入所中に面会などを通して、関係を修復していったり、修復していったりしてる。」と語られるように、入所中から、施設と家庭の関係づくりを行い、少年達の帰る場を作っている。

ただ、「生活が崩れちゃう。元の生活に戻ったり、率先してしたり。地域に戻るわけなんで、みんないるので遊んじゃう子は遊んじゃいますよね。そこを断ち切るのは難しい。」などと語られるように、中で規則正しく生活し自分の課題をみつめ克服していても、地域に戻ると流されて前の状況に戻ってしまう。これはサリバンとグラント夫婦による『対人成熟水準に基づく非行理論』における④同調的非行文化同調型(主体性が低く、身近な優勢な風潮にそまってしまう)のタイプといえよう。「その子が1、2年で変わる事ができなかったりとか。」とも語られているが、やはり時期が来たり家庭が帰れる環境になると施設を出なければならないため、短い期間で対人関係の基盤を作れない子もいるだろう。そうすると施設は生活基盤を学習したり、物事の(善悪などの)判断を学習する場としては十分機能するし、被虐待児も多いということなので一定期間、安定した生活を送れる場としても機能しているだろう。しかし、精神分析的理論で述べられているような、超自我の生成や二者・三者関係の基盤の構築という面では不十分なのではないだろうか。

もちろん、少年達も年齢が上がるし、施設は家庭ではないのでずっといるわけにはいか

ないため、全てを施設だけでは対応できないだろう。そこで、「施設から出ると児相が繋がって、通所とかあるんですけど。それ以外だと少年センター。警察ですよ。地域の病院とか、そういうところで繋がる。あと、民生委員。その方をお願いして、訪問してもらったり。地域だったり、児相だったりまちまちなので、そこにある資源を使うって感じです。」と語られているように、他機関との連携が重要である。しかし、二者関係の基盤が不安定な子が施設の人との関係と切れて、出てから新たにいい関係が築けるだろうか。もちろんできる子もいると思うが、そうでない場合、悪い事をしていないか時々様子をみるという枠組みにとどまってしまうだろう。では施設職員が施設を出た後もケアを続ければと考えるが、「人が足りない。やる事が多すぎて。今児童福祉を扱う領域はどことも人で足りないもので、手が回らないっていうのが現状ですね。」などと語られるように、どこもかしこも人手不足な現状がある。一人ひとり施設を出た後の経過を辿れたらとも語っていたが、人手不足なため難しい。やはり一人ひとり対応しようと考えたと、今の制度上では人手不足に陥ってしまうので、支援を広げることは難しいだろう。

以上より、児童自立支援施設では、外の刺激から隔離された環境で育て直しが行われているが、二者関係の基盤がない子は施設にいる短期間だけでは難しく、アフターケアの必要性を感じている。しかし、人手不足のために手が回らず、施設を出た後のケアが思うようにできない。他機関も人手不足のため、生活の様子をみるだけの枠組みになってしまっているように考えられる。

③ 弁護士

弁護士は全員が直接非行経験のある少年の支援をしている職業ではないが、少年事件をよく受け持ち、非行経験のある少年の支援団体などに所属している方にインタビューを行った。

「子ども達に関わる時に、まず最初に家庭の環境とか、恵まれてない子がわりと多いんですね。もともと育ってきた環境自体がよなくて、貧しかったり常に暴力に晒されていたりとか」などと語るように、家庭環境について多く語られていた。これは、非行原因に関する総合的研究調査(2010)でも、『虐待と非行の関係』について言及されている。さらに、内閣府の平成 17 年度少年非行事例等に関する調査研究報告書では、『重大なストレスが脳に大きな影響を及ぼすという点については、たとえば大人の外傷後ストレス障害 (PTSD) で海馬をはじめとする脳の形態的・機能的な変化が生じることなどが確定してきた。いわゆる、早期幼児期から反復的に強いストレスにさらされる児童虐待が記憶系や衝動抑制系をはじめとする子どもの脳の発達に可逆的あるいは不可逆的な変化を生じさせるであろうことは容易に想像できる。その結果、非行への親和性が増すといった結果をも招く』とも

述べている。また、「そういう環境があんまり良くない子ども達っていうのが、居場所がなくなって外に居場所を探す…よからぬ先輩達が声かけてくるだとか。劣悪な環境におかれてしまうって事が、まずあるんですね。」とも語られる。家庭に居場所が感じられずに外に出て、そこで出会った人と悪い事をしはじめると言う。また、家庭などで勉強をする環境がなく、そのまま勉強をしないでいると、次第に学校の勉強もわからなくなっていき、学校にも居にくくなるとも語っていた。非行原因に関する総合的研究調査(2010)の考察でも、非行少年の特徴として、親友を得たきっかけが街で知り合った友人とあるように、外に居場所を求める傾向になる。さらに、何か事件が起こったときも、「普通の家庭のお嬢さんがたまに万引きした時とかは、親がごめんなさいって誤りに行って、それからお金を払ってもうさせませんからって。そして警察の人も親御さんをみて、ちゃんと監督してくれるなと思うじゃないですか。環境の整ってない子どもの場合、一回万引きしただけでも、親がちゃんと謝罪できなかつたりだとか、これからも監督できなかつたりすると、家庭に返してっていうのじゃない処遇を選んでいってしまう。」と語られている。家庭に子どもを抱える能力、監督能力がないと判断されると、児童相談所や警察などで対応せざるおえなくなる。家庭に子どもを抱える能力がないということは、母子関係や父子関係にも葛藤が生じているだろうし、超自我が生成される前の発達段階だと考えられないこともない。

さらに、少年院や児童自立支援施設を出た後の環境について「出た所の環境が良くないと、また元の状態に戻ってしまう。また家庭自体がそういう家庭だと、お父さんお母さんに「こういうもんじゃないよね」って話しても、なかなかそれを受け入れてもらえなくて、戻っちゃうってことがあるので、戻った時の環境っていうのはすごく大事だと思うんですね。」と語られている。これはサリバンとグラント夫婦による『対人成熟水準に基づく非行理論』の④同調的非行文化同調型(主体性が低く、身近な優勢な風潮にそまってしまう)とも考えられるし、主体性が低くなくとも、自分を監督する立場にいる親の考えが犯罪に近いのであるならその様に考えるようになってしまうだろう。

また「ふっきれてるかそうでないかっていうのは大きな違いなのよ。話していて、前にいた古巣をどうしてもかばうだとか、自分の生きやすい道だっていうのが出て来ちゃうと、価値観として、正しい道というか法に触れないという観点で、視点がずれてるのかなっていうのは感じますよ。…非行的な思考に寄ってる子っていうのは、繰り返しちゃいますよね。」と語られている。この場合は対人成熟度が低く、まだ社会化されていないと考えることもできる。また、つかまる前にいた居場所が一番居心地いいため、善悪関係なくそこに戻りたい。さらに、少年院や施設を出るまでの間で、信頼できる大人に出会えなかったためとも考えられるだろう。立ち直り研究でも『出会い』の重要性について述べられているが、立ち直りの過程で『出会い』がなく考えを変えるきっかけがなければ、少年院や施

設での教育も入っていないのであろう。

最後に、立ち直り支援の資源について保護司の活用についても言及している。「保護司さんって立場の方いらっしゃいますよね。少年院に行かなくても保護観察ってすごく多いでしょ。最初に出会うのは保護司さんだと思うんですよね。その段階でその方達が上手く機能して社会で暮らしながら上手くフォローしてくれたら、本当はすごく役に立つんでないかなと思うんですよね。」と今ある資源活用について、社会に少年をつなげていける工夫があるのではないかと考えている。さらに予防の観点として「非行犯した後はどうしたらという話は出るんだけど、本当は予防の観点、非行になる前に学校とかでどうみれるかっていうのが大事なんだよね。学校での教育っていうのは手が足りないせいか、あんまりできないかなって感じなんです」と語るように、予防の資源としての学校で、子どもを抱えることができないかとも考えている。

以上から、虐待や親が子どもを抱える能力がないなどの家庭環境が非行要因として大きいと考えており、再犯の要因としても少年自身の思考が立ち直りの方向を向いているかと、戻った時の環境の状態がいかどうかという点が大きいと考えられている。また、非行防止や再非行防止のために、今ある資源の活用がもっとうまくできるのではないかと考えられている。

④ 保護司

保護司が非行経験のある少年と関わるのは、司法処分といい、家庭裁判所が決めた保護観察を受ける場合である。保護観察とは少年が社会の中で更生できると判断されたときに、保護司が補導援助しながら社会で生活するという処分である。そのため少年院を出た少年は、だいたい月に2度のペースで保護司と会う。

非行の原因について「保護観察をうける原因をみると、いろんな所で居場所がなかったんだよね。」と語るように、家庭環境が悪く家にいたくない、学校にも居場所がないと語る少年が多かったと述べていた。また立ち直りが上手くいったケースとしては、親自身に精神的余裕ができたりとしっかりし、安定している家庭に帰れるケースだと述べていた。さらに、再犯が心配なケースとして、少年院を出た後に母親に引き取りを拒否されてしまって、施設に入り自分で生活していかなければならないケースだとも語っていた。これは立ち直り研究の白倉(2010)の「保護能力」がしっかりしたため再犯に至らなかったケースであろう。立ち直りの要因として、家庭などが自分の精神的な居場所になれば立ち直りの促進要因になると考えられている。

また立ち直りについて「私たちの立場の立ち直りって、再犯防止なんです。出した後にまた捕まってほしくないっていうのが第一で。逆に言えば、捕まらなければ立ち直った

のかなとも思えるんだけど。」と語るように、立ち直りとしては外からみえる状況をとらえている。ただ、「私たちが管理してる期間意外はわからないから。学会でも話題に出たんだけど、更正保護で期間の問題があるんだよね。その先も続けたらっていう意見もあるんだけど、法律があるから難しい。」と語るように、半年から一年程度の短い期間しか関われないため、その間に再犯したかどうかで立ち直りを判断するしかないと考えられている。

さらに帰る場所という物理的な居場所も必要だと考えている。また、「やっぱり地域の理解は得られにくい。」とも語られており、就職に関してなども少年院に行っていたという過去が地域になじみにくいと考えられている。さらに、「地域が豊なら、困ってる人が誰もいなくて、みんな余裕もてれば、受け入れる気持ち的に余裕があれば違うかもしれないけど、今は大学生も就職できない。そんな中で帰って来た人を受入れるのは後回しになる。」とも語られている。家庭の場合もそうだが、社会も今は余裕がない状況なため受け入れが難しい。社会の非行経験のある少年に対する、受け入れられないという状況が立ち直りを妨げる要因の一つとして考えられている。

「身分は非常勤国家公務員だから、地域のおじさんだけど保護司の時は公務員としての働きをする。」「私は保護司の活動は今のままでいいと思う。前に比べたらだいぶよくなったしね。保護司の所に来るのに、来ない子もいたんだけど、警察も協力してどこにいるか探せるようになったんだよね。ちょっと強制力が強くなった。」と語られるように、保護司としての立ち位置として、地域側からの支援というよりは、公務員としての姿勢で行っており、対人関係の構築など精神的な繋がりよりも、再犯をしないかという枠組み的な意味合いが強いように感じられる。

以上より、非行の要因としては家庭内に居場所がなく、親が少年を受け入れる力がない場合である。また、社会の少年に対する否定的な状況も立ち直りを阻害する要因だと考えられている。また、立ち直りは再犯をしない事ととらえ、非行をしていないかどうかという枠組みを重視しているように感じられる。

⑤ BBS 職員

BBS とは、非行経験のある少年たちに、同世代の、いわば兄や姉のような存在として、一緒に悩み、一緒に学び、一緒に楽しむ民間のボランティアである。主な活動としては①ともだち活動と言い、保護司や保護観察官・児童相談所から依頼をうけ、非行経験のある少年たちの話し相手・相談相手となって彼らの成長や悩みの解消を手助けする活動。学習支援なども行っている。②グループワークと言い、非行経験のある少年達と BBS 会員がグループになってレクレーションを行う活動。③社会参加活動と言い、保護観察所と協力し、非行経験のある少年達と社会奉仕活動などの様々な活動に参加する。④非行防止活動と言

い、広報活動やイベントなどを地域で実施し、非行のない明るい社会をつくろうとする活動を行っている。BBS の活動として「居場所作りというか、再非行しないために、予防の観点から、放課後地域の子ども達を集めて学習会をしたりしている。」「地域の子どもを集めて、風揚げとかそういうイベントを開催したりしている。」と語られているように、友達活動として非行経験のある少年と一対一で関わる活動も行っているが、予防の活動として小さい頃から地域と関わる活動であったり、少年を地域につなげる活動に重点をおいているのがわかった。

さらに友達活動について「統計があるわけではない。友達活動をしていて再非行をした事例は少ない」とも語られている。依頼されるという通常の友人関係とは異なるが、一緒に勉強をしたり、買い物など遊びに行ったり、メールで連絡をとりあったりと、一対一の関係を構築しようと努めているように感じられる。ただ、「友達活動って BBS 会員がやりたいと思ってもできない。依頼がないとだめで、例えば保護観察感から、友達がいなくて来年高考進学希望してて、面倒みてくれないかって言われて頼まれてできるからね。」「(期間は) 決まってない。保護観察官が決めたり、依頼先が決める。」と BBS 会員が主体となって関係をつくれないので、不安定な関係だといえなくもない。保護観察が終わると関係も終わってしまうこともあるというので、期間でいうと 1 年程度が多いとも語っていた。再非行した事例は少ないというのは、保護観察中に再非行していないということではないだろうか。後々の経過を追っていないので、そのあとの再非行していないかどうかはわからない。ただ、実際の BBS 会員から「はじめは本音が見えなかったけど、ぽつぽつとやりたいことを話すようになった」という語りもあるため、関係づくりがうまくいっているケースがたくさんあるのも事実である。

また、立ち直りについて「本人が生きてる事に前向きに努力できるかって事だと思う。本人のがんばりと精神的安定。それは一人では難しいよね、何かサポートがないと。悩むとか打ち明けられるひと、本当は親だといいいんだけどそうもいかない事が多いから。だとすると次に友達だけど、ここも悪いのと良い友達がいるから、周りにそう話し相手がいるかどうか。BBS がそういう話し相手になればいいなと思うんだけど。」と語っている。家庭で安定できればいいのだが、家庭だけではうまくいかないの、外に信頼して話せる人をつくるれば、立ち直りの促進要因になると考えられている。民間のボランティアという立場もあると思うが、非行をしない枠組みをつくっていくという考えよりも、対人関係の構築を目的としているように感じる。また、勉強をしたり、一緒に健全に遊びに行く友達との一種の『出会い』として機能しているとも考えられる。

さらに「本人が非行しないためには、地域の力が必要。少年はやっぱ地域に帰るから、その地域の目が受け入れられるようなものでないと。一度過ちを犯してるって事で地域か

ら白い目でみられて、職場にも煙たがられて働けないとか。やっぱり地域の理解は大切だね。」と語られるように、地域の理解が立ち直り、地域に帰るためには必要だと考えている。

以上より、立ち直りとして地域の理解が重要だと考えている。また予防の観点から小さい頃から地域に関わる活動を通して、地域で子どもを抱えられるような環境をめざしている。さらに保護観察中の少年と一対一の関係を構築することにより、信頼して話ができる居場所を提供たいと考えられている。

⑥ まとめ

非行経験のある少年を支援する立場として、どのように考えているのかをまとめた。

非行の要因としては、虐待や親が子どもを抱える能力がないなどの、家庭内に居場所がない環境が挙げられている。また、居場所のなさという点で、精神的にいられないと感じる居場所も大切だが、物理的な帰る場所も必要だと述べられている。

さらに立ち直りを阻害する要因として、戻った時の環境の状態がいかどうかという点も挙げられている。さらに、社会の少年に対する否定的な状況も立ち直りを阻害する要因だと考えられている。さらに、そもそも、少年自身の思考が立ち直りの方向を向いているかどうかという少年自身の問題も提示された。

次に、立ち直りの支援としては、人手不足や再犯防止が第一目標となっているため、立ち直り支援の資源が、生活の様子や犯罪をしていないかどうかをみるだけの枠組みになってしまっているように考えられる。その資源の活用がもっとうまくできるのではないかと考えられている。

次に、立ち直りを促進する要因として、自分の話ができる、信頼できる人との『出会い』が必要だと述べられている。さらに、一対一で関わる機会をふやすことで関係づくりの基盤つくることを目的としているが、制度上の問題で関われる期間が制限されることもあるため、上手くいかないこともある。

最後に予防の観点が述べられていた。小さい頃から地域に関わる活動や他機関との連携を通して、地域の繋がりを強化することで予防をしようと考えている。

以上より、家庭環境などが一因となっている、超自我の生成不全や二者・三者関係構築の基盤ができていなかったり、対人成熟度が未熟であるために、環境によって流されやすい子が多い。そこで一対一関係を作ったり、長期にわたるサポートが必要だと考えているが、制度や人手不足のために、決まった期間に非行行為をしていないかどうかと様子を確認するにとどまっているよう考えらる。

3. 研究Ⅱ

研究Ⅱでは、非行経験のある少年のインタビューを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチはヒューマンサービス領域においての分析、また現象がプロセス的な特性を持っている場合に適した研究である。また、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは面接調査の分析に適しており、手続きが詳細で具体的であるため、分析方法として用いることとした。

3-1. 対象者

対象者は全部で4名であり、少年院に行った経験のある方（男性1人、女性3人）である。年齢は20代～30代で、今は仕事をしている人と学校に通う人で犯罪から遠ざかっている。さらに全員、NPOの自助団体に所属している。

3-2. データ収集

データ収集は2013年2013年12月である。少年院に行った経験のある方とは筆者がNPOの自助団体に参加し、数人にインタビューの依頼を行った。そこで話してもいいとおっしゃってくれた4人に協力していただいた。場所は神奈川県内の対象者の都合のつく場所で行った。

インタビューは50分～80分程度の半構造化面接を行った。質問項目は、「非行を行っていた時の状況、考え」「立ち直ろうと思った時・立ち直ったと思った時の状況、思ったこと」「立ち直る時にあったらよかった支援」を中心にインタビューを行った。

3-3. 分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。小林(2007)によると、グラウンデッド・セオリーとは、継続的威嚇分析法による質的研究で生成された理論である。さらに、データに密着した独自の概念をつくって、それらによって統合的に構成された説明図が分析結果として提示される。次に、人間行動の予測と説明に関するものであって、同時に研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された範囲内における説明力にすぐれた理論である。修正版グラウンデッド・セオリーが対象とするのは、通常思われているより限定された狭い範囲である。限られているけれどもその範囲内に関しては、人間の行動の予測と説明については十分な範囲である。

本研究では、まず分析テーマを設定した。今回は「少年院卒者の立ち直りのプロセス」

とする。次に概念の生成を行った。修正版グラウンデッド・セオリーでは、データの解釈から直接概念を生成する。他のグラウンデッド・セオリーと違い、概念のレベルに分析の中心を置き生成した個々の概念の説明力、説明範囲に応じて上下両方向への包括関係に調整した。また、文脈を断片化せず、研究者の問題意識に忠実に、データをコンテキストでみていき、そこに反映されている人間の認識や行為、それに関わる要因や条件などをていねいに検討していくといった。次に、分析ワークシートを作成した。1 概念 1 ワークシートとし、概念の数だけシートを作る。ワークシートには、概念名、その定義、具体例、理論メモの項目がある。概念名を考えながら、理論メモの項目に、他の解釈案や疑問、アイデアなどを同時に記入していった。服うすの関連しあった概念のまとまりからカテゴリーを作り、いくつか概念が出てきたところで概念刊の相互作用の関係を見つけていった。

3-4. 概念生成の例

概念生成の 1 例を示す。(表 2)。「まずクリス的な考えは 48 時間以内が大切だって。彼ら曰く、出てすぐにドラックやってる人に会うのか、真っ当な人に会うのかでその人の人生が大きく変わるって。で、そういう話を聞いたときに、日本の少年院で全うに生きるんだって中で思って、他にも結構いるんだけど、それで外に出るんだけど、ギャップがすごくて、それに打ちのめされてダメな方にながれていっちゃうっていうのがよくあケースで。少年院に居るときの真っ当に生きたいって気持ちをキープするために、出てすぐ普通の感覚の人と会うのでだいぶかわるなって。」という文脈から、再犯のリスクは社会に帰ってきてから出会う人に関係し、犯罪に近いところにいる人だと再犯が起こり、彼が言うまっとうに生きている人だとまっとうに生きやすいという事を述べていると解釈し、定義：社会に出てから出会う人により、再犯するかどうか決まる 定義：環境に流される とした。類似例には、「昔の知り合いから覚せい剤を進められた」や「結婚して旦那が犯罪に位階所にいたので、そのまま自分も流された」や「やっていると行くと、もうだめ」というものがあつた。理論メモでは、犯罪に近い人と会うか会わないかで、再犯の有無が変わってくる。社会との環境の違いに耐えられなくて戻ってしまう事もある。などである。

表 2 概念例

概念名	環境に流される
-----	---------

定義	<p>社会に出て出会う人により、再犯するかどうか決まる。</p>
バリエーション	<p>① まずクリス的な考えは48時間以内が大切だって。彼ら曰く、出てすぐにドラックやってる人に会うのか、真っ当な人に会うのかでその人の人生が大きく変わるって。で、そういう話を聞いたときに、日本の少年院で全うに生きるんだって中で思って、他にも結構いるんだけど、それで外に出るんだけど、ギャップがすごくて、それに打ちのめされてダメな方にながれていっちゃうっていうのがよくあケースで。少年院に居るときの真っ当に生きたいって気持ちをキープするために、出てすぐ普通感覚の人と会うのでだいぶかわるなって。</p> <p>② そこにいい思い出があるからもう一回やってみたいってのもあるし、薬物やってる子は辛い事あるとそっちに逃げ道があるのを知ってるからそっちに行っちゃう。でも、今はそういう逃げ道じゃなくて、友達に聞いてもらおうとかで、自分に溜まったものを解消できる。その当時はどうしたらいいかわからなくて、苦しくて、そっちの方に逃げてたって言います。</p> <p>③ それで、その時に昔の知り合いに会って勧められたのが覚せい剤だったの。その時は自分なんか生きていてもしょうがないとかどうでもいいとか誰も困らないと思ってたから、迷いもなく始めて。初めて3ヶ月くらいで職務質問されて、腕をみせてみろって言われて、そのまま逮捕されたの。その時もどうでもよくて、捕まったとか少年院とか、人生とかどうでもいいと思ってて。</p> <p>④ 友達とかで、離婚してその後知り合った人の影響で今までなかったけど犯罪に走る人もいるし、犯罪に近いところにいると難しいんだなって。</p> <p>⑤ 環境だと思います。覚せい剤打つなっていって堅く約束しても、周りがやってる所にいけばもうダメだけど、誰もやってない所にいけば、やる環境もないし。</p>
理論的メモ	<p>犯罪に近い人と会うか会わないかで、再犯の有無が変わってくる。(気持ちをキープするため。昔の楽しかったもの、楽になったものがちらつくと、決意は揺らぐし流されてしまう。48時間とか短い時間もあれば、結婚してって時間がたつてからの時もある。だから立ち直りは不完全っていつののだと思う)</p> <p>また、社会との環境の違いに耐えられなくて戻ってしまう事もある。(社会の目や自分に対するプレッシャーからつらくなって、逃げ道としての再犯。ただ、周りに環境がなければしたくてもできないので、つらい時にあると流れる)</p>

3-5. 結果と考察

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析をした結果、12 の概念と 2 つのカテゴリーが生成された(表 3)。これらの概念とカテゴリーを比較検討し、結果図(図 6)とストーリーラインを作成した。

表 3 分析の結果

	カテゴリー	概念名
1	立ち直りの土台	正直さ
2		自分を変えられる力
3		出会い
4		視野の広がり
5		社会との繋がり
6	立ち直りの安定	今までと違う仲間
7		受け入れられる感覚
8	立ち直りの障害	環境に流される
9		資源の活用のできなさ
10		場所としての居場所のなさ
11		普通がわからないという不安
12		社会のネガティブな目

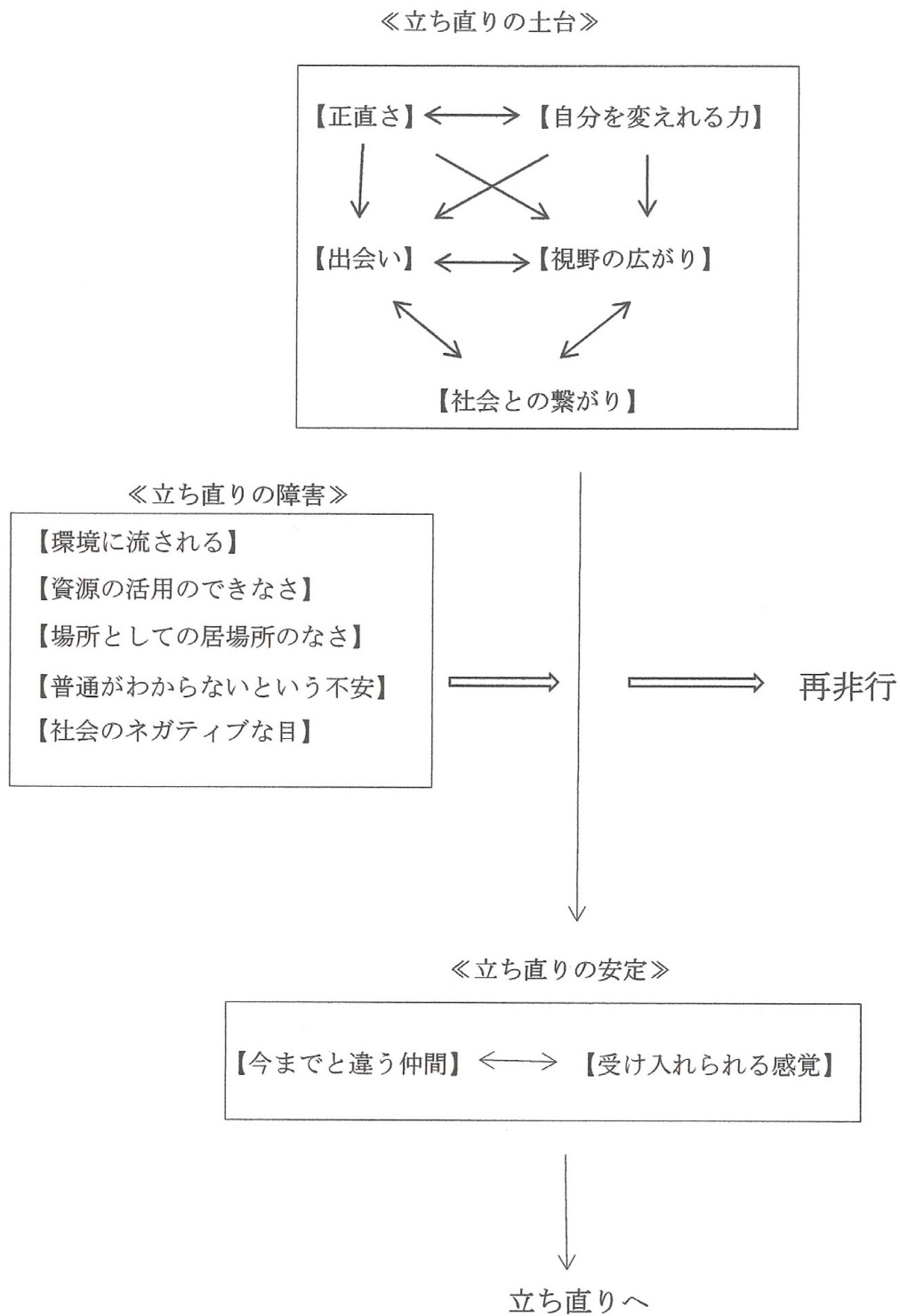


図6 少年院卒者の立ち直りプロセス

以下、最初に全体のストーリーラインを示す、各カテゴリーについてストーリーラインを示し、さらにデータの抜粋を提示しながら概念を説明する。

表記には、概念を【 】、カテゴリーを《 》であらわした。

3-5-1. 全体のストーリーライン

少年院卒者のインタビューから、立ち直りには《立ち直りの土台》作りがある。自分や周囲対しいかに【正直】でいられるか。さらに今までの【自分を変えられる力】を手に入れると、周囲の言葉が入るようになってくる。その状態で、信頼できる人や守らなくてはいけない大切な人と【出会い】、今までとは違う生き方や将来の展望などの【視野の広がり】を手にいれられ、【社会との繋がり】ができる。ここは、【出会い】があるから【視野の広がり】ができた場合もあれば、【視野が広がり】ができたため【出会い】に気づけたとも言えるため、この3つは相互に関係している。さらに、その状況で《立ち直りの安定》ができれば、その後再非行することは少ない。犯罪から遠い環境にいる【今までと違う仲間】と信頼関係を重ねることによって【受け入れられている感覚】を得ることで、《立ち直りの安定》を感じられる。

しかし、様々な要因によって《立ち直りの障害》が生じる。《立ち直りの安定》を得られる前に、犯罪に近い【環境に流される】事があったり、少年院を出て地域に帰る時に【施設内とのギャップ】に戸惑いを感じたり、親元に帰れないなど根本的に【場所としての居場所のなさ】を感じていたり、まっとうに生きようと思っても【普通がわからないという不安】を感じたり、【社会のネガティブな目】が気になって地元になぜいづらくなっている。こうした《立ち直りの障害》によって、まっとうに生きようと決意していても、非行をまたしてしまう。

3-5-2. 各カテゴリーの説明

以下、それぞれのカテゴリーと概念について詳細に述べる。

《立ち直りの土台》

ここは、少年院卒者が立ち直っていこうと考えた際のきっかけを語ったカテゴリーである。

(1) 【正直さ】

ここでの正直さとは、他人に対して自分を偽らないことや、自分に対しても逸話らにな

いでいることを指している。ある対象者は「正直さとか誠実さをもってるかってのがあると思う。自分を大きくみせたり悪ぶったり、真面目ぶったりする人ほど、悪くなる。」と語っている。また別の対象者は、「今までの一年間を振り返ってみて、これはいいんだ・これは悪いんだってちゃんと最初に残っていたりして。でも、何か良くて何が悪くてっていうのも実際には理解してないし、いいこちゃんでいちゃうんですよ。今までのことがあって反省して、もう後がないみたいな。やっぱりいい子ちゃんしているとその後また悪い方向に落ちちゃう。」と語っている。悪い方向でも良い方向でも、自分の中に葛藤がある状態であると、後々辛くなってしまう。その葛藤が解消されると、安定してくるので、外に目を向けられたり人の話が聞ける余裕が生まれるのだろう。

(2) 【自分を変えられる力】

これは、自分なりのこだわり、例えば髪の色だとかスカートの長さだとかいう小さいものから、非行に対する考え方まで、までの自分と変えることのできる力である。例えば、「昔やってた事が、昔は髪を金髪にして黒にしろって言われても、何でかわからないけど、できなかったの。今だったら、職場で黒くしなさいって言われればするし、そんなにないのよ、こだわりが。」と語っている。また「大人になったのかな。自然とそういうのがなくなった」とも語っていた。立ち直るには、今までの考えややり方を変える必要があるので、今の自分にこだわらなくなると、そういった新しい考えも受け入れていけるようになるのだろう。また別の対象者で「少年院にいたときから、まっとうに生きようって思ってた」と語っている。少年院や施設で、こういった力の獲得ができた例であろう。

(3) 【出会い】

ここでの出会いは、信頼できる人・尊敬できる人・大切にしたい人との【出会い】である。例えば、「悪い事している行為があんまりイケてないと思う事ってきて。してる時はカッコいいと思ってたんだけど、集団でやってない事をやって一目おかれようとか思って悪い事を競い合ってた、それがクールだと思ってたんだけど、そうじゃなくなってきた。それ以外の生き方とかカッコいい事を提示してくれた大人に会ったことで、そういう生き方もあってカッコいいなって。」と語るように、今までの悪い事以外にも道を提示してくれる大人との出会いだったり、「調査官の人に聞いたら、「今の君なら社会で生きていける」って(言われた) 初めて自分を一人の人として扱ってくれる人に出会ったのが調査官で。」と語るように、信頼できる人に信頼されるというのも、きっかけの一つとなっている。さらに「命の大切さに気づいて。」と語るように、守らなくてはいけない対象ができた(出会った)ときにもきっかけの一つとなっている。

(4) 【視野の広がり】

対象者の語りで「非行少年って、びっくりするぐらい視野狭いから。」というものがあっ

た。そもそも、どういった将来の展望があるのかがまったく想像できないようだ。「(NPO 団体に所属するようになって)弁護士さんとか色んな人に会う機会が増えて、弁護士ってこういう仕事してるんだとか初めて知ったし、自分と違う世界の人と会える。(参加者に)大学生もいて、その人に影響受けて大学行った人もいるし。」とも語っていた。また別の対象者は「道を沢山用意してくれたらいいなって。私は一個しか道がみえなかったんですね。実際何年かたって世界をみると、まだまだ可能性、悪い事した私だけど可能性があつて。」さらに、「見本というか、こうなりたいイメージがあるといいなって。そういうイメージというか目標があるといいですよ。」と語っていた。少年院を出た後にどういった生活をしてほしいのか、どういう人生を歩んでいる人がいるのかという知識も立ち直りには必要だと考えられている。この視野というのは、出会いがあったから広がったと考えられるし、視野を広げられたから出会えたとも考えられる。また社会と繋がりとの関係でも同じことが言えるであろう。

(5) 【社会との繋がり】

これは、【社会との繋がり】ができたなと感じたこと、社会の一員だなと自覚したことが、立ち直りの要因の一つであるという考えである。支援者は「健全な仲間として、仕事して、この社会で生きているっていう感覚を持つ。」や「色んな人と関わって社会を作ってる、社会のうちの一人なんだなって思った時には、自分でもいい感じになったな、真っ当になったなって思った。」と語っている。研究ⅠのBBS職員の方も地域との繋がりを重視していたが、負担なく社会の人と関わっていけるということも、立ち直りの要因のひとつであろう。

《立ち直りの安定》

ここは、立ち直るきっかけを得た後、どのようにして立ち直りを継続させているかを語ったカテゴリーである。

(6) 【今までと違う仲間】

一人で立ち直っていくのは難しい。「仲間がいるってのがキーワードで、その仲間って言うのもまっとうな犯罪してない仲間」と語られるように、今まで一緒にいた仲間ではなく、犯罪から遠いところの仲間を作る。さらに、それが「何かあった時ひふらっと立ち寄れる居場所」であるといいなと語られている。また他の対象者は「ゆっくりでいいんだよって行ってくれる家族とか、それをわかってくれている仲間がいるっていうのが大事。」「ダルクとかセカンドチャンスとかプログラムの人を本気で信頼してきたら、そこの人たちって本気で返してくれて。」とも語られている。これは前にいた環境から遠ざかるという意味合いもあるだろう。

(7) 【受け入れられている感覚】

これは、【今までと違う仲間】の中や、家庭の中などで【受け入れられている感覚】をもてると、安心して自分の気持ちを話せる場所、仲間があるという考えである。例えば「結構まめに声かけてくれる人が大事だなんて。コミュニケーションを取るのが苦手な子が多いんですよ。犯罪者全員ってわけでもないけど。明るい子もいるけど、明るくてもコミュニケーションが苦手な子もいるから寂しくなってきたりとか、そういう子が多くて。コミュニケーションが取れない子が多いから寂しくなってきたりとか。何かあった時じゃなくてもこまめに連絡くれて、大丈夫って言ってくれる人がいると大きな支えになる。」さらに「ダルクとかで「すみません、遅刻します」っていうと「大丈夫だよ、ゆっくりきてね」って行ってもらえるんですよ。その気遣い、走ってくると転ぶよみたいな事をいってもらったりもして」「ダルクだったらすっぴんでいれる。プログラムだと泣いちゃうこともあるんですよ。そういう素の自分を受け入れてもらえる。」と語られるように、信頼でき安心してコミュニケーションとれている感覚が大切であると考えられる。また、対人関係が苦手だとも語られており、二者関係や三者関係の構築できるように、受け入れられている感覚を味わえる場で対人関係を構築できることが求められているのだろう。

《立ち直りの障害》

ここでは、立ち直りを妨げる要因について語られたカテゴリーである。

(8) 【環境に流される】

ここでは、社会に出て出会う人により、再犯するかどうかが決まるという考えである。「日本の少年院で全うに生きるんだって中で思って、他にも結構いるんだけど、それで外に出るんだけど、ギャップがすごくて、それに打ちのめされてダメな方にながれていっちゃうっていうのがよくあるケースで。少年院に居るときの真っ当に生きたいって気持ちをキープするために、出てすぐ普通の感覚の人と会うのでだいぶかわるなって。」と語られている。他の対象者も「そこにいい思い出があるからもう一回やってみたいってのもあるし、薬物やってる子は辛い事があるとそっちに逃げ道があるのを知ってるからそっちに行っちゃう。」「覚せい剤打つなっていって堅く約束しても、周りがやってる所にいけばもうダメだけど、誰もやってない所にいけば、やる環境もないし。」とも語られている。研究Ⅰでも少年院や児童自立支援施設から戻ったときの環境が大事だと考えられているように、少年院卒者の少年の間でも、戻った時の環境によって変わると考えられている。また、犯罪に近い環境にいるから犯罪に流れるという考えもあるし、施設と外のギャップにとまどってしまって、その不安から昔の環境に戻ってしまうとも考えられる。

(9) 【資源の活用のできなさ】

ここは、立ち直りの資源はあるが、上手く活用できていないという考えである。「保護司

さんって無料で引き受けてくれてるってのを知らなかったの。おじいちゃんおばあちゃんだし、心を開くとかはなかったですね。」という語りをはじめとして、保護司や保護観察官に心を開いて話せないという語りや、「最初の3ヶ月は本当に昔の仲間に連絡を取らなかったんですよ。その後は連絡とってたんですよ。でもその話は保護司さんにしなかったりとか。まあ、働いていたので、どれだけ自分はちゃんと働いているか、給料はどれくらいもらっているかっていう話しか。」と言われるように、言える事柄だけ報告していて、もう悪い事をしませんよというアピールの場になっており、【受け入れられている感覚】をもてるような関係づくりはできていないようだ。

(10) 【場所としての居場所のなさ】

物理的に帰る場所のない場合がある。「男女だと男子の方が多いんですが。初等少年院だとほぼ帰るんですが、何回目かだと、三分の一とか半分が帰る所がない。親が引き取らなかったり。」と語られている。やはり、帰る場所がないということは、家庭で受け入れられていないという事である。もし、少年院を出る前に考え方が変わり、未来がみえた状況であったとしても、帰る場所がないと、それだけで不安定になるので立ち直れないだろう。

(11) 【普通がわからないという不安】

こえは、まっとうに生きようと思ったときに、普通の子はどうしてるのだろうという【普通がわからないという不安】が生じ、それが立ち直りの妨げになるという考えである。ある支援者は「まともに生きるってどうやるんだと思って、普通の子がどういう服を来てどういう本を読んでどういう生活をしているのかがまったくわからなくて。」さらに「高校も中退して、一年間は働いていたけど。ルールっていうか、どういう割合で働けばいいのか、どういう割合で休めばいいのかわからなくて。」と語っている。どのようにすればいいかと気軽に聞ける相手がいないため、不安が解消できず、辛くなったところで再犯におちいつてしまう。

(12) 【社会のネガティブな目】

これは、社会の目が気になり、地域に居場所がないと勘じてしまう、という考えである。「私が地元に住みたくないのは、未だに言われてしまう事があって、地元って昔の喧嘩した子がいっぱいいるので。それに、まったく知らない人にも少年院あがりだってレッテルを貼られるので」というように、一度少年院卒だと知られると、周りの人に嫌煙されてしまう事がある。さらに、「社会の人全体が理解してくれたらいいなって。スウェーデンのクリスっていいなと思うんですが、社会が違うんですよ。社会の立ち直りに関する見方が。少しでも多くの人が立ち直りの人生について理解してくれたらいいなと思います。」と語られている。ただでさえ、対人関係にネガティブは子が多いので、レッテルをはられてしまったら関われなくなるし、地域での物理的な場所も失いかねないだろう。

3-5-3. 考察

少年院卒者に半構造面接を行い、修正版グラウンデッドセオリーアプローチで分析を行ったところ、立ち直りの土台をつくり、そこを安定させることで、立ち直りが促進するというプロセスが判明した。このプロセスから、少年院卒者が立ち直りの際にどのような支援を必要としているのかを議論する。

まず、《立ち直りの土台》作りの段階では【正直さ】と【自分を変えられる力】という内面の要因が2つ挙げられている。ここは、先行研究であげられてた「内省力」や「支援を受け入れる力」と近いものだと考えられる。【正直さ】はありのままの自分でいられる事と同意であるとする。自分を大きくみせなければ相手と関係が築けないという不安から【正直さ】を得られないのではないだろうか。また、【自分を変えられる力】というのは、大人になると自然とできるようになると多く語られていた。これは非行をしたときに思春期で不安定な精神状態であったのが、安定してきたため得られたとも考えられるが、少年院で強制的に安定した生活を送れたということも大きいのではないだろうか。ただ、「少年院の中にいるときに、まっとうになろうって思っていた」という語りもあるように、少年院の中にいる時に育てられている場合もあると考えられる。

次に《立ち直りの土台》では【出会い】【視野の広がり】【社会との繋がり】という、3つの要因が挙げられている。この【出会い】も先行研究の白井ら(2011)で述べられている。この「調査官の人に聞いたら、「今の君なら社会で生きていける」って(言われた) 初めて自分を一人の人として扱ってくれる人に出会ったのが調査官で。」という語りは、【出会い】の重要性を象徴しているように考えられる。ただ誰かと出会うのではなく、相手から信用されるという関係性が重要であるのではないだろうか。この対象者も、両親との関係が希薄だったとの語りもあったため、誰かとじっくり関係づくりをする経験が乏しかったと考えられるため、誰か大人と信頼し合える初めての【出会い】で立ち直りのきっかけを得られたと考えられる。つまり、対象者が欲していたのは、信頼し合える関係の【出会い】であると考えられる。さらに、【視野の広がり】は、将来のビジョンが想像しにくいという意味合いを含んでいる。それは、少年院を出た後、「働く」しか考えられなかったという対象者がいた。その後色々な人と出会ううちに「まだまだ可能性、悪い事した私だけど可能性があつて。」と考えられるようになった。それは、同じ境遇の人が色々な道をみつけて生きていて、みんな明るくキラキラしているのを見て思ったという事を語っていた。ここでは生き方の見本・目標など、「学校に通えるよ」「こんな生き方できるよ」という具体的な道筋を提示して欲しいと感じていると考えられる。最後の【社会との繋がり】は様々な【出

【出会い】の中で地域社会に組み込まれていくだろうし、そうすると【視野の広がり】も拡大するであろう。やはり、家庭を含め卒院後は地域社会で生活することになる。そこに物理的・精神的居場をみいだせれば、関わる環境も増えるため立ち直りを促進させる要因になるのではと考える。

次に《立ち直りの安定》では【今までとは違う仲間】と【受け入れられている感覚】という2つの要因を挙げている。【今までとは違う仲間】では、やはり先行研究のサリバンとグラント夫婦による「対人成熟水準に基づく非行理論」からもわかるように、主体性が低いタイプだと周りに流されやすい。その流れを断ち切るためにも、今まで一緒に悪い事をしてきた仲間以外の仲間を作る必要がある。少年院では、昔の友人と会わないという約束をして出るのが、不安定になるとやっぱり連絡をとってしまう。そこから再非行につながる事が多いという。さらに【受け入れられている感覚】とは、仲間であったり家族内での関係の中で【受け入れられている感覚】を得ることが《立ち直りの土台》を安定させるには必要であると考えている。例えば【出会い】の所の家庭調査官は、あの時限りでもう会わなくなる。それでは立ち直りのきっかけにすぎず、不安定な状態のままである。なので、仲間のなかでそのような信頼しあう関係が作れる人と出会い、その中で【受け入れられている感覚】を味わうことで、今までなされてこなかった対人関係の基盤の構築がなされていくのではないだろうか。やはりここでもたんなる【新しい仲間】というよりは、対人関係が構築できる人がいる仲間を欲していると考えられる。

最後に《立ち直りの障害では》【環境に流される】【資源の活用のできなさ】【場所としての居場所のなさ】【普通がわからないという不安】【社会のネガティブな目】という5つの要因が挙げられている。【環境に流されるは】上でも述べたが、対人成熟度が低いと主体性も低くなり、流されやすくなる。なので結局昔の仲間に進められると断れずに再非行が行われてしまう。さらに、「不安なためとりあえず一緒にいるけど、本音で話すとかそういうことはなかった」と語る対象者もいたように、不安で一緒にいたいからその環境に流れ行ってしまう。さらに、適切な関係を築ける仲間ができていたならそちらに行くとも語られていた。また【資源の活用のできなさ】は、保護司など地域との連携に一役かってくれそうなイメージがあったが、あまりにも年齢が離れすぎているため、通うという義務を果たしている子がほとんどだという。せっかく保護観察の子全員にいつのだからその場も、対人関係構築の場にできれば、よりスムーズに立ち直りが行われるのではないだろうか。【場所としての居場所のなさ】は少年院を出て帰る家がない。またこの場合親に拒絶されているため、立ち直る方向を向いているこでも、また再非行に繋がってしまうだろう。違う行先で、受け入れられる体験ができればいいが、そうでない場合は生活の基盤を作るという作業も同時にしなくてはいけないため、安定するには時間がかかりそうだ。さらに

【普通がわからないという不安】は、そのまま普通の子の生活がわからないという不安である。洋服や流行のTVの話題から、仕事がつらくなったときどうやって乗り越えるかといった、対処法まで様々である。普通になりたいと思っても、その普通がわからなければ難しい。誰か信頼し合える人との関係ができればその人あ提示する事もできるし、仲間との関係が作れたら、そこで聞くけるだろう。こういった事を聞けない環境が不安材料を増やしていると考えられる。【社会のネガティブな目】では、そもそも社会に帰ってきて、その社会で頼れる人がいなければ立ち直りは難しい。さらに少年院卒者というレッテルをはられると、ますます自分の中いこもってしまうので、どこかで信頼し合える人と出会える事や、新しい仲間を見つけるのも難しいだろう

以上より、立ち直りは対人関係の構築をのぞんでおり、二者関係や三者関係が安定して構築できるようになれば、立ち直りは促進されていく。《立ち直りの土台》を作る段階でも、《立ち直りの安定》の段階でも、信頼し合える人とどのように関係を構築していけるかという点を重視していると考えられる。

4. 総合考察

この章では、研究Ⅰと研究Ⅱを比較して、支援者が提供しているもの・考えと非行経験のある少年が望む支援の差を論じていく。

4-1. 総合考察

2つの研究結果の大きな違いは、支援者は再犯をしない枠組みを提供しているが、少年は対人関係の構築をしたいと望んでいる点である。支援者の立場では、家庭環境などが一因となり、超自我の生成不全や二者・三者関係構築の基盤ができていなかったり、対人成熟度が未熟であるために、環境によって流されやすい子が多い。そこで一対一関係を作ったり、長期にわたるサポートが必要だと考えているが、制度や人手不足のために、決まった期間に非行行為をしていないかどうかと様子を確認するにとどまっているよう考えられる。しかし、非行経験のある少年は、信頼し合える人とどのように関係を構築していけるかという点を重視していると考えられる。この差が、立ち直り支援の擦れ違いを生んでしまったり、支援から漏れてしまう子が出てくる一因ではないかと考える。また、研究Ⅱの立ち直りの障害で、様々な不安を抱えている様子がわかったが、その不安を抱えられる資源はいまのところない。こうしたニーズの差が再犯率の高さの一因になっているとも考えられる。また、支援者が真剣に少年達に向き合っているという事は、今回のインタビューを通してとても強く感じられた。この様な方が、少年達との信頼し合える【出会い】を多く持てたらいいだろうなと感じた。

4-2. 今後の課題

今回は、支援者は関わる職業につき1人だけで行った。そのため、個人の考えも含まれてしまうため、あまり信頼性が高いとは言えない。なので、その時々での支援者がどう考えて支援を行っているのか、同じ職業内で複数人に調査をし、分析する必要があると言える。さらに、非行経験のある少年も、今回は再犯率という点から立ち直りを考えたため、少年院を出てある団体に所属している人たちのみで行った。例えば犯罪の種類や処遇の違いによって、立ち直りのプロセスも違いがあるかもしれない。今後は、違った場合の立ち直りも今回の結果と差があるかどうか検証する必要があると言える。

5. 謝辞

本研究に際して、様々なご指導を頂きました下川昭夫先生に深謝いたします。また、インタビューに快く協力していただいた皆様に感謝いたします。

6. 引用・参考文献

- ・内閣府(2010) 世論調査報告書平成 22 年 11 月調査
- ・内閣府(2010) 非行原因に関する総合的研究調査
- ・内閣府(2005) 平成 17 年度 少年非行事例等に関する調査研究報告書
- ・警察庁(2013) 平成 24 年中における少年の補導及び保護の概要
- ・警察庁(2013) 平成 24 年警察白
- ・藤川 洋子(2009) 非行少年における発達障害
- ・小林寿一(2008) 少年非行の行動科学—学際的アプローチと実践への応用— 北大路書房
- ・小林康仁(2007) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GAT)の分析方法
- ・白倉憲二(2011) 非行少年の立ち直りを促進する要因についての探索的研究
- ・白井利明、岡本英生、小玉彰二、近藤淳哉、井上和則、堀尾良弘、福田研次、阿部晴子(2011) 非行からの立ち直りに関する生涯発達研究(VI)—「出会いの構造」モデルの検証—
- ・安香宏(2008) 犯罪心理学への招待 犯罪・非行を通して人間を考える サイエンス社
- ・松島秀明(2005) 関係性のなかの非行少年 更生保護施設のエスノグラフィーから 新曜社
- ・藤岡淳子(2001) 非行少年の加害と被害—非行心理臨床の現場から 誠信書房
- ・村尾泰弘(2008) 少年非行を知るための基礎知識 明石書店

7. 添付資料

同意書

修士論文のインタビューにご協力くださり、ありがとうございます。

私は、修士論文において「非行経験のある少年の立ち直り」について研究しようと考えております。この研究は、非行少年の検挙件数は減少していますが、再犯率が増加しているというところに着目し、再犯の要因の一つとして「居場所」が得られないためでないかと考えました。そこで、非行経験のある少年に関わりのある方・少年本人にインタビューを行い、立ち直りのプロセスや問題点を明確にし、どのような事・物が必要であるかを論じます。

このインタビューには 60 分程度の時間がかかります。インタビューへのご協力は任意です。このインタビューを通してご提供いただいた情報に、研究者以外の第三者が触れることは ありません。また、研究成果の報告では、複数の協力者から収集したインタビューデータを統合した形で扱いますので、個人名や機関名が出ることはありません。なお、研究データに誤りがないよう、インタビューの音声を記録させていただきます。この記録は研究データとして慎重に扱い、第三者が聞くことはありません。

もし、質問に答えたくない場合には、お答えにならなくても結構です。またインタビュー調査への協力を中断したい場合には、その旨お申し出があればいつでも中断します。

以上の条件でインタビュー調査に協力することに同意いたします。

平成 25 年 月 日

氏名